教職課程センター紀要　第 4 号　69-77 ページ、2019 年 12 月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ. No.4 69-77, Dec. 2019

論文

「戦争文学」をどう教えるか
――文学教育と言語教育の接近の試み――

How can War Literature be taught?
A New Attempt for an Approach to Literature Education and Language Education

田中　寛
Hiroshi TANAKA

Keywords 戦争文学　文学・言語教育　加害・被害意識　平和資源　平和学

要　約

戦争文学を文学の授業でどうとりあげるか。また、そこにあらわれた日本人の戦争加害意識、被害意識を多文化共生の認識の中にどのように反映させていくかは、作品教材の選定とともに重要な課題である。本稿はここ数年筆者が担当してきた全学共通科目「文学」で試みた実践報告である。平和学という授業体系のなかで文学の授業、講義をどう位置づけるか。教材の選定、解説のありかた、さらに戦争文学をテキストとして読み解く方法論を試論した。日本語の表現を深く読み解く作業と同時に、戦争文学を「平和資源」として見つめ直す意義についても提起した。

１．はじめに――文学と言語の教育連携に向けて

本稿は全学共通科目の一つである「文学」の講義科目について、平和学を構成する授業の一環として、言語教育と文学教育の接点、もしくは融合を模索する試みである。筆者は日本語教育に長く携わってきたが、一方で常に言語を核として、歴史、文学を考える立場・手法を模索してきた。歴史を考えることは、外国人日本語学習者の背景、日本との歴史的なかかわりを知るための、ひいては教師と学習者をつなぎ学習者の関心を高めるために必要不可欠な手続きである。同時に、アジアの人々から真の信頼を得るための努力の一つであり、こうした意識なくして多文化共生という理念も空洞化する、という認識が筆者の姿勢である。そして文学はその現実的統合の一つの表現手段であり、こうした関心からこれまで幾つかの拙文も試みてきた[1)]。

言語と文学の関係でいえば、言語習得とはただ言語そのものを学ぶ、教えるという手続き、既成の枠組みにとどまらず、作品を通じて日本語の表現を学ぶ過程であると考える。たとえば、「かもしれない」「はずだ」という推量・確信の表現ひとつとっても、日本語教科書で学ぶ文例、場面と文学作品を通して学ぶのとでは相応の違いがある。実際に作品の中でどう用いられ、作者、登場人物の心情をどのように表しているのかを見極めえないことには、この言語用法を「理解」したとしても「体得」したことにはならない[2)]。小論はこうした意識の上に立って、文学研究の側からではなく、言語教育（日本語教育）に携わる側からの文学接近試論である。

２．言語教育と文学教育の接点

筆者は常々、日本語教科書にあらわれる例文、教材に戦争と平和に関する内容、場面題材がなぜ工夫配慮されないのかという、素朴な疑問を抱かされることがある。たとえば、

私は戦争がきらいです。戦争には断固反対します。

⇒　嗜好・賛否表現

戦争で沢山の人が死にました／殺されました。

⇒　因果・受動表現

戦争をなくすには何をしなければなりませんか。

⇒　目的・義務表現

もし本当に歴史をまなんでいたならば、戦争にはならなかったはずです。

⇒　仮想・後悔の表現

といった例文はおそらく、どの日本語教科書をひっくり返しても出てこないだろう。これはそもそも語学の授業、テキストにイデオロギーや思想を持ち込まないといった暗黙の了解があるからとしかいえないが、世界の普遍的な価値観の最重要の課題である戦争、平和という認識をキーワードとして若い世代に移植する努力を、教育の現場に立つ教員一人ひとりが自覚しなければならない。その発信力によって、学びの発信力、世界観（戦争観）も形成されていくのであろう。語学は語学、文学は文学という個々の垣根を取り払い、双方向の学びの場が提供できれば、また文学の受容の仕方も新しい表情を見せてくるのではないだろうか。教える側は新しい「意識」の芽生えを傍観して待つのではなく、絶えず何らかの形で提供する側でなければ享受する側の感性も育たない。文学と言う容器を意識させることは、また新しい言語観を喚起させることにもなるはずである。

一方、文学作品を心情的、感情的な情操面でも理解しつつ、そこにどのような語彙、表現で構築されたのかも、言語表現教育の視点から学ぶことが出来れば、作品の重層性、奥深さもより有意義に享受されるだろう。文学そのものへの覚醒、見直し、取り組みにも大きな影響を与えることにもなる。そのためには作品の選定、時代背景の把握、作者作家の立場、思想とともに、作品にあらわれる異文化、表現の心理的な諸相を、被害者、加害者という単なる対極的な二者対立的なとらえ方だけでなく、人間のそれぞれの極限下における状況を丁寧に読み解いていく手続きも必要な作業であるにちがいない。

ところで、さまざまな文学のジャンルのなかで、戦争文学ほど扱いにくい対象はないように思われる。戦争文学は大きくは[前線＝戦場]をテーマ、舞台にして書かれた作品と、[銃後]の暮らしをテーマにした作品とに分かれるが、時空間、題材共にそれぞれ多岐にわたる。前者では、中国大陸、満洲：中国東北、台湾・朝鮮、南方諸地域など地理的空間的に広くわたるし、また時代もいつから含めるか、という点も考慮しなければならない。後者では日本国内でも東京大空襲、沖縄戦をはじめ国内の戦場場面があり、また少年少女たちの疎開した環境での暮らし、出征兵士を送り出した家族の暮らしを描いたものもある。時代で言えば戦場の前線で書かれたものもあれば、戦後に戦争体験を回顧した文学作品もある。また戦争未体験世代が戦争を素材にして書いた作品も近年少なくない。後者ではＳＦ的な作品手法も取り入れられる。戦場と戦地、そのはざまで揺れ動く人間像をどう理解するか、様々な読みの姿勢がためされる[3)]。なお、戦争文学の範疇には、ルポルタージュ、ドキュメンタリー的な性格が強いもの、日記、随筆といった記録文学、俳句、短歌、詩といった短詩形文学に分類されるものも存在するが、本稿では小説を考察の対象とする。

３．使用テキストと授業使用の実際

授業では『戦争を＜よむ＞』（石川巧・川口隆行編、ひつじ書房 2013）を用いて、適宜、教材を補充する形で進めて行った。このテキストは大学における１セメスターを 15 回の講義と想定した章立てとなっている。しかし、各章を一回 90 分の授業でカバーするのは題材が重ければ重いほど困難である。文学鑑賞・分析に入る前に歴史的な理解も必然的に求められ、近現代史を履修していない多くの受講生にとってはなおさら配慮が必要である。同書の編集趣旨を概観すると、内容については「戦争を題材とした定番テキストを網羅的に紹介するのではなく、それぞれの局面を考えるうえで最もふさわしいと思われる」テキストを各章の執筆者が独自の判断で選定している。また、本テキストは「戦争を教えるための教科書ではなく、戦争の様々な局面を〈読む〉ことを通して人間や社会を学びなおす」（傍点、ママ）。ことを目的としているそれぞれの章には担当者による⑴「本章の要点」、⑵「〈本文〉の引用」、⑶「作者紹介」、⑷問題編成（SCENE の解説）」、⑸「研究の手引き」、⑹「参考文献」がある。「本章の要点」では問題意識、「作者紹介」は作者の時代背景と作品、「問題編成」は抄録された作品の解読・分析、「研究の手引き」は作品の評価、研究内容である。本文作品は部分抄録である。このほか、関連年表、注、地図などの図版やグラフ、また各章のあいだにはコラムが挿入されている。内容の解説のほかにも作品の舞台・時代背景、登場人物の指向などについての説明も配慮されている。表記は「原則として新漢字とし、ルビは適宜、補足、削除」している。各章は担当者の選定作品として 14 名の執筆者が担当している。ただ、執筆担当者のそれぞ

れの関心から編まれた長所の一方で、やや統一に欠ける点もいなめない。戦争文学を専門研究とする執筆者と学習者の関心とは必ずしも符合しない。双方の懸隔を埋める作品の紹介と丁寧な説明が不可欠となる。統一を排した多様性こそ、戦争の内実を見つめる視点なのかもしれないが、そのあたりの事情解説については授業担当者が要所要所で補っていく必要があろう[4)]。

全15章の目次は次のようになっている。

第1部：第1章～第5章　兵士たちの戦争
第2部：第6章～第10章　戦争の日常
第3部：第11章～第15章　記憶としての戦争

以下、各章につき、①作品名　②作者　③内容、テーマを記す。

第1章　①「汽車奇談 村へ帰った傷兵」
　　②小川未明
　　③傷痍軍人、出征兵士と少国民
第2章　①「戦争の中の建設」
　　②木原孝一
　　③宣撫の実態、文化建設の苦悩
第3章　①「神聖喜劇」
　　②大西巨人
　　③軍隊生活　内部の腐敗構造
第4章　①「魚雷艇学生」
　　②島尾敏雄
　　③学徒出陣　特攻の現実と仮想
第5章　①「赤いくじ」
　　②松本清張
　　③引揚げの真実　解放下の植民地
第6章　①「香に匂う」
　　②佐多稲子
　　③出征兵士の家庭　男女の恋愛感情
第7章　①「炎の中」
　　②吉行淳之介
　　③銃後・空襲　戦争の中の日常
第8章　①「わが内なる戦争と戦後」
　　②黒田喜夫
　　③農村の荒廃と戦争への「希望」
第9章　①「アメリカンスクール」
　　②小島信夫
　　③戦後社会と言語の勝者・敗者
第10章　①「ガイド」
　　②池沢聡
　　③沖縄の戦後、敗戦の遺産
第11章　①「望郷と海」
　　②石原吉郎
　　③シベリア抑留、戦争犯罪の記憶
第12章　①「葦船、飛んだ」
　　②津島佑子
　　③疎開、銃後の少年少女の追憶
第13章　①「空罐」
　　②林京子
　　③原爆、後遺症と日常の破局
第14章　①「セミの記憶」
　　②古山高麗雄
　　③従軍慰安婦の過去と現在
第15章　①「サラム」
　　②S・ネザマフィ
　　③難民、現代の戦争と災禍

第1部「兵士たちの戦争」では戦地における兵士の生態である。日中戦争から太平洋戦争にかけてのさまざまな時空間での体験を扱う。第2部「戦争の日常」では必ずしも戦時期に限らず、戦後の追憶・回想による戦争の追体験でもある。第3部「記憶としての戦争」では戦争の記憶がどのように作品に反映されているのかを読み解く。時空間は日本から東南アジア、中東のエリア、また戦時から戦後にまで及ぶ。

前期では第1章から第7章までを、後期では第8章から第15章までを扱うことにした。実際の授業では各章を二回に分け、初回は作品、作者、時代背景の解説とシーン前半の精読、二回目はシーンの後半部分と補充教材の解説という手法で進めて行った。テキストには編集者の関心が強く表れており、必ずしも学習者の知りたい関心、試用する教師側の関心がすべて反映されているものではない[5)]。基本的なテキスト、知識を与えるのは教える側の補完する重要な義務でもあろう。また、その副次教材の選定についても教師側の力量が問われることはいうまでもない。授業を活性化するためにも重要な作業である。今日の世界情勢も踏まえながら、作品を紹介することで、より過去と現在、未来をつなぐ学習者の関心をつないでいくことができるだろう。大学の一、二年生を対象に使用する場合は当然ながら適切な解説と副次教材の準備が求められる。読書体験が限られている対象者を考えれば、定番とされる作品もぜひ紹介しておきたい。さらに内容理解を助けるためには、授業の中で戦争文学を映像化した作品を視聴したり、関連講演会の案内、関連施設の見学会を実施するなどの工夫も織り込む必要があろう。以下、各章についてコメント及び追加教材を列記する。

４．前期授業の構成と学びの実際

以下、各章の導入について、これまでの実践の要約を兼ねながらみていくことにする。なお、副次教材としては『戦争と文学』（集英社 2011-2015）はじめ、これまでの戦争文学全集や文庫本を含む戦争文学アンソロジーから適時採用した。開講時に戦争文学の定義、範囲を各種文学事典を参照しながら具体的に認識させた。近代は日清・日露戦争、シベリア出兵など、また戦後は朝鮮戦争なども当然ながら含まねばならないが、本テキストにならい、日中戦争から太平洋戦争、戦後の戦争（紛争を含む）を扱う。また、テキストに入っていく前に戦争文学と戦争体験について理解を深める論攷として「戦争体験と文学」（高橋和巳）を用いた[6]。

第１章の「汽車奇談」他は授業の初回としてはやや扱いづらい内容である。まず、戦争文学の中で戦時児童文学の占める位置を認識する必要がある。また、小国民に戦争協力を呼びかけるくだり、戦争美化についても注意して講義を進めることが重要である。テキストとしては山中恒『戦時児童文学』（大月書店 2010）が唯一参考になる。また授業では田中(2015)で扱った国分一太郎の作品なども紹介した。国分一太郎は生活綴方教育という遺産を残し、戦後の国語教育にも大きな影響を与えた人物であるが、戦時中の戦争協力という点では研究の空白を埋める作業がすすんでいない感がある。そうした文学者の戦争協力についても関心を喚起させることにした。

第２章の「戦争の中の建設」も戦争文学の定番と比べて、かなり異色の作品選定である。思想戦としての建設（東亜新秩序・大東亜共栄圏建設）下に宣務撫班として加わる詩人青年の苦悩を記した作品であるが、作家は硫黄島の戦場についての詩作もあり、その連続性なども注視したいところである。戦争が建設戦であり、思想戦、心理戦と言う総力戦であることも解説。なお、第１章と合わせて日中戦争の戦争文学の範疇に入ることから、石川達三『生きてゐる兵隊』、火野葦平『麦と兵隊』、田村泰次郎『蝗』などについても言及した。

第３章の「神聖喜劇」は戦争文学の中でも異色の長篇である。パロディに富んだ作品ながら、軍隊の組織についてのシニカルな、かつ赤裸々な批判があり、それはまた現代社会の組織論にも通ずる。軍隊内部の陰湿な組織悪については野間宏『真空地帯』が一方にあるが、この二作品の比較考察も重要である。なお、表現精読では性に関する描写、また中国兵に対する加害描写も作品中にあり、そのことも注記した。また、戦争文学の中では九州方言の多様など類まれな実験的な手法がとられ、長篇構成になっている各章の梗概にもふれた。

第４章の「魚雷艇学生」は、特攻に赴く学徒兵のおかれた戦場心理を、「湾内の入り江で」の一節をとりあげながら読み解いていく。おそらく、特攻を主題に描かれた戦争文学ほど、戦争文学の中で特異な対象はない。戦争文学には原爆文学、沖縄文学といった、その極限に特化した作品をカテゴリー化することも可能であろうが、「特攻文学」は加害でもあり、被害でもあるという意味から、ほかの戦争文学にはみられない重層的な読みが必要になってくる。作者の島尾敏雄の主要作品としては、ほかに「出発は遂に訪れず」を併せて紹介した。また、島尾と共に読み継がれる梅崎春生の「桜島」、晩年の作品「幻化」の一節も紹介した。

第５章の「赤いくじ」は社会派作家松本清張の特徴を遺憾なく発揮した作品で、敗戦直後の朝鮮半島でのできごとを、おそらくは実話にもとづいた構成で日本人のなかにしくまれた愛憎の心情を活写している。ともすればミステリー的な構成の作家として読み解かれがちな作家の反戦的な意図をめぐっては、他の作品「市長死す」なども紹介した。また、国民作家としての位置づけについては司馬遼太郎の『坂の上の雲』をはじめとする歴史ものについても説明し、これと対極にある松本清張の社会派的な作風、思想的な位置づけについても要約を行った。

第６章の「香に匂う」は佐多稲子の作品で、出征兵士を送り出した銃後の日常を女性の心理から描いた。孤独と恐怖、不安にさいなまれる妻の心境、助け合う周囲の戦争に対する不安なども投影させながら、男女の信頼、夫婦間の絆を確かめ合う作品である。これまでの作品とは趣を異にした、銃後の日常を女性側から描いた。静かに進行する戦争文学ともいってよい。副次教材としては高井有一「この国の空」を紹介し、戦時下での暮らしにも関心を持たせるようにした。

第７章は多くの空襲を描いた作品のなかでも、日常の銃後の側から描いた吉行淳之介の作品である。空襲を描いた、記録した文学もまた日本の戦争文学の中の一つのジャンルに数えられるだろう。諸作品をアンソロジー的に編んだ作品集は「原爆文学全集」に納められるが、独立した編集が必要である。「夕暮れまで」「砂の上の植物群」などによって成熟した文体で知られる吉行淳之介の表現手法を学ぶ機会とした。

なお、前期の課題の内、戦争詩、戦争短歌、戦争俳句のいずれかを対象に短詩形文学に戦争がどのようにあら

わされたかをレポートとして課すことにした。前期のビデオ鑑賞では映画「幻化」(1967 年制作、原作：梅崎春生)、映画「海と毒薬」(1986 年制作、原作：遠藤周作)を鑑賞した。また、同期間中に行われた講演会、研究会などの催しについても紹介し、積極的な参加を呼びかけるようにした。

５．後期授業の構成と学びの実際

ひきつづき、後期の授業構成について述べる。後期の作品はおおむね、太平洋戦争の後半から戦後の占領期社会、現代の戦争へと推移する。

第 8 章の「わが内なる戦争と戦後」は詩人のエッセイであるが、テキストとしては扱いづらい作品である。戦争に至った社会背景、時代の空気を詩人の言葉を通して読み解く作業は、ややもすると抽象的な論理におされて戦争文学から何を学ぶかという主題から遠ざかる一面もあるのだが、何気ない日常に忍び寄る戦争の前史を読み取る作業でもある。そして、戦後の日常との想像を絶するギャップ。寒村荒廃がもたらす戦争への期待というパラドックス。内容は異なるものの、第 11 章の「望郷と海」とも精神的背景では通底している。

第 9 章の「アメリカンスクール」は戦争自体を扱った作品ではないが、戦後の教育改革、とりわけ英語教育を通じて、言語の敗戦国側から勝利国の言語を見た心理小説である。今日、英語、英語教育・学習がグローバル化とともに巨大化しつつあり、勝利国の言語がもたらす弱者の悲哀なるものが対照的に描かれている箇所を読み解く作業である。登場人物の中に、わずか数年前の中国大陸での残虐行為をオーヴァーラップさせるところも戦争トラウマのなせる場面であろう。

第 10 章の「ガード」は沖縄の戦後を、これも基地で労働に携わる敗者、弱者としての日本人、それも本土からは虐げられた側の沖縄人から見た告発である。勝者としての強者との身分的格差の虚脱感にも似た感情の荒野である。基地と言う戦後の異空間で屈辱的に味わわされる現実は、いまなお基地の中におかれる沖縄の現実を語ってやまない。国内におけるもうひとつの戦争責任であると同時に、終わらない沖縄戦の遺産を共有する試みである。なお、集団自決や鉄血勤皇隊の最期などを扱った作品として、目取真俊、吉村昭などの短編も紹介した。

第 11 章の「望郷と海」は、シベリア抑留を現在に引きずる評論的回顧エッセイである。戦争直後に受けた国家的犯罪から何をどう学ぶのか、また、収容所内での極限下の日常から生きるためのどのような知恵を学んだのか。同胞の赤裸々の心理をあらわす文脈からは、同時に歴史問題として、シベリア抑留という史実を知る機会でもあり、戦後処理問題と合わせて読み解く作業を行う。この非人道的なシステムがどのような悲劇を生んだのか、今なお大きな溝を生み出している日本とロシアとの関係についても注意を喚起させる作品である。

第 12 章の「葦船、飛んだ」は疎開、銃後の少年少女の追憶を題材にした作品である。過去と現在が交錯する挿話であり、何よりも「疎開」にうまれたもう一つの異空間を通して、記憶がどのように甦るかをモチーフとしている。疎開児童の現実は学童疎開から集団疎開にいたるまで検証が進んでいるが、戦争文学に見られる「疎開文学」もまた、注記する必要がある。高井有一「少年たちの戦場」、「北の河」など、もう一つの目から見た作品も紹介した。

第 13 章の「空罐」は林京子の長崎の被爆体験をモチーフにした作品であるが、本書のなかで唯一、原爆を主低音にした作品である。原爆投下の生々しい実態を描くというよりも、戦後のさまざまな抑圧下で生きて来た女性たちの日常を淡々と描いた作品で、原爆後遺症がいかに日常に大きな影を落としているのかを読み解く作業である。原民喜「夏の花」などをおさめた『何とも知れない未来に』(大江健三郎編)、井伏鱒二「黒い雨」、青来友一「爆心」なども紹介した。

第 14 章の「セミの記憶」は南方の従軍体験のある古山高麗雄の短篇戦争小説である。「プレオ―エイトの夜明け」ほか、数篇の作品をふくむ『二三の戦争短篇小説』の他の作品群も紹介した。中国大陸に従軍した作家たちとはまた別に南方に派遣された作家たち、また従軍慰安婦を描いた作品としても顕著な作品を通して、戦争の遺した負の遺産を学ぶ。従軍慰安婦をモチーフにした作家、作品として田村泰次郎の「蝗」等一連の作品も紹介した。

第 15 章の「サラム」は、本書で唯一、外国人日本語作家のシリン・ネザマフィイの短篇で、現代の戦争をあつかっている。現在も世界各地で展開、勃発する局地的な戦闘、戦場に目を向けさせる作品で、現代の戦争と災禍を戦後の、戦争未体験者がどうえがくのか、という問題意識をもって読む機会である。第二次世界大戦後の朝鮮戦争、湾岸戦争、中東戦争、イラクイラン戦争など、現代の戦争に目を向けさせる作品である。

以上、各作品の骨子を概略述べつつ、戦争文学を扱う

際の基本的な注意点にもふれた。

後半の作品は前半と比べて、やや起伏に欠けるようなところがあるものの、重要な作品を含んでいる。それは戦争の戦後処理、戦争責任という認識である。いわゆる戦争責任論、戦後責任論という課題である。また、そうした意識の欠如が昨今の東アジアと日本との軋轢を引き摺っていることも認識させる必要がある。単に戦争文学を流し読みするだけでなく、理解するテキストとして読み込む手法を教える工夫がもとめられる。

テキスト全体を概観、内省してみて、教養課程に学生を対象にした作品として見た場合、作品の選定にもいくつかの問題がないわけではない。主要作品よりについての解説、教材化、主要作品の年表、作家一覧、戦争文学を学ぶ上での諸注意などが求められるだろう。また、各章に受講生に思考させる設問が用意されておらず、この点は講義を進める場合、特定の文脈について分析を促すなどの配慮が必要であろう。例えば、

課題⑴　あなたはこの作品の主人公の心理についてどのように考えますか。
課題⑵　同時期の戦争文学の作品について作家と作品を一覧化しなさい。
課題⑶　南方徴用作家について文学事典などで調べ、作家作品を一覧化しなさい。

などといった設問である。授業を離れた後も、学習者自ら積極的に戦争文学に関心を持たせるためにも重要な作業であろう。なお、授業中に鑑賞した映像作品は主として夏に放映された戦争記念番組の中から紹介を行った。

・2017 年度授業　ＮＨＫスペシャル　従軍作家たちの戦争　2013 年 8 月 14 日放送
・2018 年度授業　ＮＨＫスペシャル　731 部隊の真実：エリート医学者と人体実験　2017 年 8 月 13 日放送
・2019 年度授業　ＮＨＫＢＳ1 スペシャル　隠された日本兵のトラウマ：陸軍病院 8002 人の病床日誌　2018 年 11 月 25 日放送

６．学習者は何を感じ、どう読み解いたか

学期末の評価について附言しておきたい。まず戦争文学史の概略を示し、最小限度履修すべき項目を確認させることが肝要である。また、授業で紹介した作家、作品の確認を、作家の紹介文より類推させる。次に最も重要な作業は、シーンの重要な箇所と思われる文章を抄録し、これに対する読み解きを問う問題である。作者の心理描写、主人公の心情など、学習者の印象、理解度を確認する上で不可欠な作業である。以下ではその問題の各所を紹介し、受講生が戦争文学をどのように理解していったかを知る参考としたい。解答例は省略した。

作問：次の文章の作家名と作品名を（）内に書き、さらに下線の部分に着目して、あなたの感想（人物の心理描写など）を、それぞれ 100 字前後で書きなさい。

⑴楠田は日華事変さなかの昭和十四年に中国にわたって、華北華中、華南の戦場をめぐった。その時、勝者の欲望がどんなものか、十分に見てきて知っている。京城からアメリカ兵が来ると聞いた時、楠田が取り憑かれた思考は、どのようにして、この四十名の勝利者をもてなそうか、ということだった。（松本清張：「赤いくじ」）

⑵その先には玉蜀黍の畑が続いていた。僕は頬に葉先があたるのを感じながら歩いていった。畠を出るとキャベツやダイコンの畑であった。一面の緑色の中で四五人の姑娘が野菜を摘んでいた。ふと僕は立ち止まって青い支那服の彼女達を眺めていた。すると彼女達の中の誰かが僕に気づいたらしい。皆が一せいに僕の方を振り向くと突然摘んだ野菜を抱えて走り出した。僕は苦笑しながら一番奥にある民家に向かって歩きだした。（木原孝一：「戦争の中の建設」

⑶もう大学生の時のような情弱な身体ではないと胸をはることもできた。学生舎の居住区で疲労の果てにうつぶして酔ったようにうつらうつらしていたことなど忘れてしまった。私にとってからだの状態が生涯で最も健やかであった時期にはいっていたのだろう。そのせいか背筋を伸ばした自分の姿勢を殊更に父や妹に見せたい気分が起こっていた。（島尾敏雄「：魚雷艇学生」）

以上、紙幅の関係から一部しか紹介できなかったが、こうした試みも文学教育と語学教育の接点を図るうえで、欠かせない作業であろう。単なる感想文、印象文に終わらせるだけでなく、表現の特徴にまで目を向けさせ、書くことの意味、読み解き、享受する喜びを学ぶ機会とした。これまでただ「読む」ことにだけ関心を寄せていたのが、「読み解く」という作業に覚醒し、文学と言う営み、戦争文学作品を通して文学史にも関心を持たせ、異文化の衝突としての戦争の負の遺産を学び直すことの意味を伝えていきたいと思う。

また授業で気を付けたことの一つに音読作業がある。各作品のシーンについては音読を励行し、表現各所に注意を喚起させることとした。音読は黙読にくらべて作品の登場人物、情景を立体的に把握する上できわめて有益

となる。

さらに、ほぼ毎回、作品の内容について短い感想文を書かせるなどの確認作業を行った。テキストには短詩形文学にふれる機会がないため、自由課題として〈戦争俳句〉、〈戦争短歌〉、〈戦争詩〉のなかからいずれかの作者、作品論をレポートにまとめて提出を義務付けた。戦争短詩形文学をどう織り込むかも今後の課題である。

7.「戦争文学を〈読み解く〉」試用テキスト作成の試み

ここで、試論として戦争文学をアンソロジーとして読み解く試みを提示したい。試用版であることから、適時改訂して使用していく用意がある。なお、〈読み解く〉としたのは、〈読む〉作業が目的、分析をともすれば欠き、これに対して〈読み解く〉作業は作者の姿勢、時代背景などを考慮しつつ、主人公ととりまく周囲の人間関係などに充分な注意を払いながら作者の主張したかった点を明らかにする〈意識的な読み解き〉である。そのためには日本語の表現に注意を払い、より深読みする技術、多角的な視点が必要である。行間を読むと同時に創造力の錬成も重要である。「書く」という作業に対して、「読む」ことの技術、手続きの構成についてはそれほど厳密には議論されない。しかし、読むことの充実，正確さを期せずして、充分な感想、分析も構築されない。授業では文脈を重視し、実際に朗読を試みながら作品を鑑賞した。授業を通して受講者の関心度、意識度を確認することが出来た。その結果、授業に堪えうるテキストの整備が痛感された。

ここでは筆者が編集をすすめている戦争文学のテキストについて試論を紹介したい。膨大な作品群から、30 回分バランスよく編集を試みることは非常に困難である。そのため、各章ごとに参考作品を掲げる必要があろう。作品解説、作者解説、用語解説なども不可欠である。また、各章に設問として、思考問題をいくつか用意する工夫も必要である[7)]。

【前期セメスターの「作品」・（作者）例】

①「野火」（大岡昇平）
②「海と毒薬」（遠藤周作）
③「罠」（五味川純平）
④「白い雲と蟻」（田中英光）
⑤「軍旗はためく下に」（結城昌治）
⑥「青春の記憶」（佐藤泰志）
⑦「祭りの場」（林京子）
⑧「裸女のいる隊列」（田村泰次郎）
⑨「桜島」（梅崎春生）
⑩「出発は遂に訪れず」（島尾敏雄）
⑪「あの花この花」（高橋和巳）
⑫「比良の満月」（水上勉）
⑬「ある中国残留孤児の場合」（中野孝次）
⑭「盲中国兵」（平林たい子）
⑮「小銃」（小島信夫）

【後期セメスターの「作品」・（作者）例】

①「わが勲の無きがごと」（津本陽）
②「赤牛」（古井由吉）
③「少年たちの戦場」（高井有一）
④「石の来歴」（奥泉光）
⑤「蝿の街」（帚木蓬生）
⑥「殉国」（吉村昭）
⑦「生きてゐる兵隊」（石川達三）
⑧「麦と兵隊」（火野葦平）
⑨「死線の彼方へ」（伊藤桂一）
⑩「春の城」（阿川弘之）
⑪「731 部隊」（中園蘭助）
⑫「水滴」（目取真俊）
⑬「爆心」（青来有一）
⑭「戦艦大和ノ最期」（吉田満）
⑮「大陸の細道」（木山捷平）

各章本文のほかに、作品の注記、作者紹介、時代背景、さらに冒頭に序章「なぜ戦争文学を学ぶのか」、巻末年表、作者・作品索引などを付すことも学習者に関心を持続させるうえで欠かせない配慮となる。また収録作品は任意の選択によることも記しておく必要がある。

作品には長篇、中篇もあり、そのなかのどの一節を抄出するかは慎重な選択を要する。注意すべきは、言うまでもないことだが、被害意識のみをとりあげるのではなく、加害意識もとりあげ、そこに学習者相互の議論が生まれることを想定しなければならない。時代的、地域的、テーマ別の偏りにも細心の注意を払う必要がある。当然ながら、こうした編集作業は客観性を担保するためにも、また作品の偏りを是正するためにも、複数の編者によるのが好ましい。

なお、このほかにも収録すべき作品が多く存在する。できれば上下二巻にして使用することも可能だろう。以下はその候補作品例（順不同）である。

「徴用中のこと」（井伏鱒二）、「夏の花」（原民喜）、「白い田圃」（古山高麗雄）、「戦争はなかった」（小

松左京)、「火垂るの墓」(野坂昭如)、「朱夏」(宮尾登美子)、「硫黄島」(菊村到)、「ビルマの竪琴」(竹山道雄)、「草原の敵」(城山三郎)、「皿倉学説」(松本清張)、「焼跡のイエス」(石川淳)、「建設戦記」(上田廣)、「知覧特攻基地」(高木俊朗)、「月光の海」(毛利利之) など

満蒙開拓団をあつかった作品、南方徴用作家についても配慮が必要である。さらには満洲文学、台湾で書かれた日本語文学なども、「アンネの日記」(ドイツ:アンネ・フランク)、「西部戦線異状なし」(ドイツ:レマルク)、「帰らぬあの日」(タイ:スワンニー・スコンター)、「紅い高粱」(中国:莫言) など、諸外国の戦争文学についても数篇とりあげる必要があろう。

以上、試用テキストとして共同製作することから、新しい視点も生まれてくるだろう。なお、戦争文学作品に隣接する対象領域として 3.11 以来の東日本大震災関連の文学作品をどう読み解くかもこの延長戦上にあるが、これについては別稿を準備したい。

８．おわりに――“平和資源”としての戦争文学

一口に「戦争文学」と言ってもその領域は膨大で、前期15回、後期15回ではとても扱いきれるものではない。また、受講者は半期制の科目故に、前期のみ、あるいは後期のみという受講形態もあらわれる。限られた回数で戦争文学を読み解く視点を教授することは困難である。だが、困難ななかにも受講者のなかから少しでも戦争と平和への関心を高め、文学と言語の共有意識を育て合う能力を培ってくれることを期待したい。

戦争文学は、平和構築のための、いわば貴重な「平和資源」と考える。日本は近代化の過程でいくつもの戦争を経験してきた。その過程から厖大な戦争文学の蓄積がある。これらを平和学の実践に生かさない手はない。平和学のとりくみは、各大学でそれぞれの担当科目教員が工夫をかさねて実践していると思われるが、その内実はかならずしも共有されているとはいえない。それぞれの視点の置き方、平和学の射程も異なるだろう。そうした複数の視点をどのように融合、対話を試みていくべきだろうか。この問題意識こそ、筆者が語学教育の中でここ数年模索してきた対象であったが、いまなお未整理のままである。近い将来、「平和学研究」という体系の中で、語学 (外国語教育)、文学教育、歴史教育の知見が連携できればと構想するが、道は険しい。小論がその問題意識を共有するきっかけとなれば、と願っている。さらにここ数年、東日本大震災を契機として、夥しい〈震災・震災後文学〉と称される作品が発表されており、人間の生命、生死をめぐる普遍的なテーマにおいては、戦争文学との接点を求める努力も求められる。

今日、人文学の衰退が叫ばれる一方で、新しい研究模索が求められている。そのひとつが時代認識を反映した学際的な研究、教育の取り組みであろう。言語教育、外国語教育も既成の枠を取り払って、歴史や文学も学べる柔軟な取り組みを進める時代に来ている。ボーダーレス時代がさけばれ、グローバル化が加速するなか、言語教育にもさらなる教授法や教材の吟味とともに、社会学、文学と言った「異種格闘技」が工夫されてよい。そうした相互の試みによって、これまで見えなかった視点、着眼点が明らかにされるだろう。たとえば、日本語教育の歴史でいえば、そこには隣国との接触の歴史が欠かせないし、文化背景を知るためにも文学を通した理解が有力な補助線となるはずである。また、言語表現をさらに深く味わうことによって、文学表現としての言葉の生命力に目覚めることにも大きな期待がよせられるだろう[8)]。

大学生の読書・活字離れが叫ばれて久しいが、これはそれまでの中学、高校における国語教育にも相応の問題が介在していたことも考えられ、一朝一夕には思考の切り替えができるものではないが、戦争文学作品の読解作業を通して、読む力を育てていくこと、また日本の近現代史に目を向けさせる機会、アジアの中の日本の立ち位置を考える共生のための認識・思考力の養成は大学教育の中でもきわめて重要な意味を持つものと考える。ここ数年、戦争文学に関する研究が進み、作品の発掘、検証も深化している。そうした成果も授業の中で触れていくことも必要である。目まぐるしく変貌する世界情勢の中で戦争と平和に向ける眼差しを養っていきたい。

ともすれば、言語教育、語学教育に携わる現場では、文学作品をどう読み解くかという視点はあたえ、与えられにくいのが現状であろう。英文学と英語学、日本文学と日本語学、中国文学と中国語学といった、双方の領域がたえず行き来して撹拌する。そうした異領域を共生させることで、それぞれに内在する視野脱落、視野狭窄の認識もいくらかは是正されてくるだろう。本稿で紹介した試み、言語とことば、文学のもつ力をより深く味わうための実践が、個々の教員が実践してくための参考になれば幸いである。

注

1）田中(2018a)、田中(2018b)などを参照。

2）日本語の習得に際しても作品との出会いを通じて世界観と同時に想像力を培うことも可能になる。その意味においても上級学習者のための読解教材にも文学作品をどう盛り込むかは、単なる文学的知識を与えるだけでなく、広く言語文化社会に注目させるうえで重要な課題である。

3）履修者（受講生）のほとんどがこれまでに現代史を履修してこなかった経緯がある。高校の授業でも歴史教育の実質的な体験が希薄なことは十分に配慮して臨まなければならない。たとえば、「疎開」「総力戦」「学徒出陣」という用語一つとっても丁寧な解説が必要になる。

4）講義概要はシラバス作成の際にほぼ同様の内容を記しているが、開講初日には再度確認する必要がある。同時に教科書購入については再三の指示、確認を行わなければならない。

5）収録作品には女性作家が二作品しか収められていない。この点についても実際の授業の中で配慮していくことが必要だろう。

6）この短い評論エッセイには戦争論、戦争文学論がよく反映されている。テキストは『高橋和巳全集』（河出書房新社 1981）から採った。田中寛「高橋和巳の戦争論・戦争文学論」（太田代志朗他編(2018)に収録）も参照。

7）主要作品の選定についても編者の主観が強く反映されがちであるが、多くのジャンルからできるだけ偏ることなく収録することを心がけた。

8）文学教育の実践は言語教育の実践とも密接につながっている。なぜならば文学評論は単なる批評におわる恐れなしとしないし、テキストの中に言語表現の磁場をもとめることによってより教育的な見地からの警鐘を可能にするからである。福田(2019)など。

参考文献

浅田次郎他編集（2012－2014)『戦争と文学』全 21 巻　集英社

伊豆利彦(2019)『文学に見る戦争と平和』木の泉社

内海紀子・小澤純・平浩一編(2019)『太宰治と戦争』ひつじ書房

太田代志朗・田中寛・鈴木比佐雄編(2018)『高橋和巳の文学と思想　その〈志〉と〈憂愁〉の彼方に』コールサック社

川村湊・成田龍一他編(2008)『戦争文学を読む』　朝日文庫

新藤彩(2016)『体感する戦争文学』　彩流社

澤地久枝、佐高信(2015)『世代を超えて語り継ぎたい戦争文学』　岩波現代文庫

集英社編（2015)『戦後 70 年を読み直す　戦争と文学スペシャル』　集英社

田中寛(2018a)「文学で刻む日中戦争の記憶――“前線”と“銃後”で作家は何を見、何を感じたのか――」『大東文化大学紀要（人文科学編)』第 57 号　大東文化大学 300（1）-284-（17）

田中寛(2018b)「文学作品にみる日中戦争下の“言語接触”――戦場の中の言語と感情――」　『教職課程センター紀要』第 3 号　大東文化大学教職課程センター 91-102

冨岡俊行(2019)『林芙美子が見た大東亜戦争』　ハート出版

中川成美(2017)『戦争をよむ　70 冊の小説案内』　岩波新書

長谷川潮(2000)『戦争児童文学は真実をつたえてきたか：教科書に書かれなかった戦争』　梨の木舎

彦坂諦(2014)『文学をとおして戦争と人間を考える』れんが書房新社

福田淑子(2019)『文学は教育を変えられるか』コールサック社

吉田凞生（1975)「戦争文学の思想――石川達三「生きてゐる兵隊」、火野葦平「麦と兵隊」など――」『國文学解釈と教材の研究』7 月号　学燈社

『すばる』2019 年 8 月号特集：「戦争を考える」　集英社